

第九十四回子規忌法要（九月例会）

子規と国際化（上）……………和田茂樹 三

秋山真之が水野広徳に寄せた手記……………九

雲林追憶の詩——「雲林遺稿選釈」付録……………谷光隆 一二

天保の女流俳人長谷部菊圃について……………伊藤隆志 一九

付長谷部菊圃年譜

釈仙海師五十年祭忌法要会に参加して……………山本耕一路 三一

子規會誌

六八号 平成八年  
一月

## 例会記録

### ○子規忌法要並びに九月例会（第六三二回）

平成七年九月十九日（火） 正宗寺本堂 参加  
六十六名

墓前祭 子規埋髪塔前

法要 本堂

記念講演

「子規と国際化」

講師 和田 茂樹氏

### ○十月例会（第六三三回）

平成七年十月十九日（木） 正宗寺 出席四十  
三名

講演「長谷部菊圃女の俳句について」

小松町 伊藤 隆志氏

### ○東予支部会

平成七年十一月十四日（火） 出席二十五名

自彊舎記念会館（新居浜市元塚）

講演「子規と漱石——俳句の開眼」

会長 和田 茂樹氏

### ○十一月例会（第六三四回）

平成七年十一月十九日（日） 正宗寺 出席二十  
九名

講演「碧梧桐・井泉水の短詩精神」

「井泉」主宰 木曾 聡氏

## 例会予告

### ○二月例会（第六三七回）

平成八年二月十九日（月） 正宗寺

講演「子規を考える一日」を読んで

会員 和田 重作氏

### ○三月例会（第六三八回）

平成八年三月十九日（火） 正宗寺

講演「子規ほか文人たちと久万」

会員 和田 正氏

### ○年次総会ならびに四月例会（第六三九回）

会場 子規記念博物館

期日その他は未定。

# 第九十四回子規忌法要（九月例会）

九月十九日（火） 十二時三十分

正宗寺本堂 参会者六十六名

墓前祭 子規埋髮塔前

本法要 本堂

司会

開式のことば

読経

献詠披講

子規遺作朗詠

漢

短

俳句（辞世三句）

尺八（伴奏）

焼香

遺族代表	会 長	会 員	会 員	会 員	会 員	会 員	理 事	会 員	副 会 長	副 会 長	副 会 長
佐伯徹也氏	和田茂樹氏	桐間龍芳氏	松本松吉氏	永田麗扇氏	玉田宝山氏	玉田宝山氏	小原伸記氏	筒井寛氏	田中義晃師	浦屋薰氏	浦屋薰氏

来賓・有志・役員

記念講演 「子規と国際化」	講師	和田茂樹氏
閉式のことば	副会長	浦屋薰氏
挨拶	会長	和田茂樹氏

記念撮影

供物御礼

金一封	会 員	山本耕一路様
糸瓜・鶏頭	監 事	三井清様
菓 子	西 宮	古賀蔵人様
菓 子	会 員	石丸律子様
菓 子	道 後	玉泉堂様
糸瓜水（二瓶）	会 員	客野錦様
紫苑花（一束）	会 員	永田茂子様

右、厚く御礼申し上げます。

献詠

表まで書き足す葉書類忌

浅海 好美

形よき瓢箪生りて獺祭忌

糸瓜忌や集へる人の恙なく

糸瓜忌と思ふ深空に風立ちし

つくづくと子規思ふ日のつくぼふし

俳人の永久の語りの獺祭忌

年毎の写真に偲ふ子規忌かな

バット持つ勇姿しのばる子規忌かな

句を学ぶ老いの幸せ獺祭忌

のぼさんと漱石の声漱祭忌

在りし日の机に筆硯子規忌かな

夢に見し月の都の子規忌かな

大いなる子規の絶句の身にしてみる

子規祀る街中にして聖の地

雲の中ボールを捜す子規忌かな

子規が子規まんじゅう食べる雲の中

独生万言千句詞 文学史乗思想垂

剝板勉強常机跡 一身無屈此瘡痕

石丸 律子

泉田伊都子

片上ゆかり

小原 伸記

菊川 意九

橘 里風

玉井 貞子

筒井 梨栄

土居 桂子

平松 好乃

別府 錦水

保木口美代

光宗 京子

山本耕一路

山本耕一路

嵐川 城山

# 子規と国際化(上)

和田茂樹

昭和六十一年、子規記念博物館では開館五周年記念行事として、

「俳句の国際化と松山」と題し、大岡信・草間時彦・佐藤和夫・ドナルド・キーン講師四人の講演と座談会を催し、松山に新気風を鼓吹した。その日本語版と英語版とはともに刊行され、広く愛読されている。

爾來十年、今回は焦点を子規にあて、「子規と国際化」とし、子規の欧米文化の受容から消化・昇華への展開について考察することとした。

## 「一」欧米文化の受容

(1) 松山中学校における英語の授業

子規は明治十三年三月一日創立松山中学校に入学(八級)七月の期末大試験を受けた。その成績表によれば、小試験 英書読方・英書問答・漢書読方・漢書問答・数学・文章の七教科で、総計二〇〇点になるよう、各科に配分している。各学年で学習した英語の教科書を順にあげよう。

明治十三年七月大試験(八級)

英語読方 パーレー 万国史

英語問答 ウイルソン 第一・第二リードル

明治十四年二月大試験(第一年後期・七級)

英書読方 スエル 希臘史

英書問答 パーレー 万国史 ピネラ 文法

クエッケンボス 小米国史

明治十四年五月臨時大試験(第二年前期・六級)

英文講読 チトレル 万国史

地文問答 コルネル 天然地学

明治十五年二月大試験(第二年後期・五級)

英文講読 スチュデント 仏国史

物理問答 クエツケンボス 物理学

生理問答 ハチソン 生理学

明治十六年二月(第四年前期・初等二級)

修身、漢文、英語、代数、幾何、歴史、生理、化学、経済

図画 (教科書名欠、十課目名のみ)

この間学制改変があり、高等科が設置されている。

三級・一級の教科名不明だが、日本史・国語はなく、「万国史」

「小米国史」「仏国史」をはじめ、地文学・物理学・生理学など原

書で学んでいる。東京でも中学二校、原書で生物・動物・植物など授業をしたという。(「漱石全集」別冊)

明治十六年六月、子規は松山中学を中退し上京。須田学舎に入り、十月共立学校に転入し、高橋是清にパーレーの「万国史」を学んだ。

明治十七年夏、英語の学力不足を案じ、進文学舎で坪内逍遙に「ユニオン読本第四」を学んでいる。

(2) 大学予備門・第一高等中学校時代の教科書・教養書

明治十七年九月大学予備門第四級に入学したが、喜びも束の間、十八年七月には数学で落第した。

明治十七年の教諭については明確にしがたいが、数学の隈本有尚

先生の厳しさは漱石の同級生らも述懐しており、英語で出題し解答も英語で要求し、黒板の前でも “What? what? Repeat again.” (何故? 何故? 繰返えし、もう一度) とせかされ、立ち

ん坊をする者が少なくなかった。子規の学級も一三人中、合格六人、不合格三人、欠八人。子規は平均点七〇点だったが、幾何三二・五点、地文学五五・五点で原級にとどまった。翌年は日本語で解答できる先生となり、首尾よく進級したし、晩年病床では厳しい薫陶に感謝している。(「櫻井一編」15頁、34年6月14・15日)

明治十八年九月(予科第四級)、翌十九年一月三十日には、同郷

の秋山真之・清水則遠、井林博政と、岩手の関甲子郎、水戸の菊池謙二郎、紀州の神谷豊太郎と七人で「七変人評論」を編み、相互に人物評をなしてまとめ、端艇・骨神など遊戯競べの中に「弄球」番

付がある。大関東は菊池、西は秋山、正岡は東の関脇と記載。ペー  
スポールがまだ普及していない時、訳語も珍らしく、運動競技とし  
ても逸早く着眼したといえよう。(「子規全集」別巻「回想の子規」)  
【子規全集別巻「回想の子規」】  
【子規全集別巻「秋山参謀」】

明治十九年九月、第一高等中学校(予科第三級、名称変更第二級)以後職員録中に「教諭」「外国教師」など並記、

英語 フレデリック、ウイリヤム、ストレンジ 英国

英語 ウイリヤム、ドウグラス、コックス 英国

の二人で、明治二十一年頃ストレンジは死亡、二十二年九月(本科一部(第二年))にはストレンジの後任はムルドックか。

英語 ウイリヤム、ドウグラス、コックス 英国

英語史学 ジェームス、ムルドック 英国

英語 ウイリヤム、アエルス 加奈陀国

三人が雇用されている。

「文部省第十三年報」によれば、これより前、明治十八年七月コ  
ックス(英語学)は九月より、ストレンジ(英語史学)は十月より  
一年間雇用継続とあり、一年に限らず、ずっと雇用されていたとい  
えよう。その授業については明らかでないが、「子規蔵書目録」(「  
子規全集第十五巻 評論日記」に所収)中にコックスの著書がある。

Cox's Rhetoric (著者【英語部】)

The Principles of Rhetoric and English Composition

for Japanese Students Part 1 (W.D. Cox 東京大学第七 明治17年)

Part 2 (同上 明治18年)

などがあり、着任前に既に前者は「コックスの修辞学」、後者は「

日本人学生用の修辭字と英語構成の原理」として二冊刊行、これを学年に応じて使用したと思われる。

十九年秋、子規は級友米山保三郎の來訪を受け、スペンサーの哲學談を聞き、翌二十年秋「スペンサーの文体論」を読んで反論しようと試みたが、「心力省減」が分からなかった。

Spencer's Philosophy of Style

(哲學門殊論部 東京大杉藩 明治20年)

が「蔵書」中にあり、子規はたゞ

最簡短ノ文章ハ最良ノ文章ナリ

はあくまで信用し、ホートレー氏 (Whately) の如く、「人ハ言語以外の意味を自ら心得するを快とする者也」か「短文ニ余意を含めたる技術の巧なるを喜み」と答えるか、明治二十三年三月にはなお五里霧中であまよつていた。【筆まかせ「第三編」】

子規の学生時代のノートは数十冊あったようだが、二十七冊を「子規學習帳」として、天理図書館に所蔵、その講義内容の部分を除き、紀行・書目・抜書・雜録などを「子規全集第二十一巻草稿ノート」に抜粋し、概ね年代順に配列している。

ノート①は「表題」Notes に明治十八年の連句・和歌・Journal (日誌) は七月三日の帰郷記事、最初の英文三行。

"Ancient Japanese Story" (終太郎の鬼ヶ島征伐談)

I think, there fore, I am.

有名なデカルトの「我思う、故に我あり」と哲學への道を示唆している。ノート表題は「〔内〕に、訳語は ( ) 内に。

〔予科第二級〕

①-④〔Geometry〕18~20年(幾個學)

④内題〔Botany Physics〕20~21年(植物學物理學)

⑥内題〔Trigonometry〕20~21年(三角法)〔予科第一級〕

〔本科一部第一年〕

①〔Physics〕21~22年内容に翻訳(和文・英文)三編がある。

"The Story of Shun" (舜ノ話 中國ノ親孝行話)

"The Destruction of the Oeyama Oni" (大江山ノ鬼退治談)

"The Story of Cinderella" (シンデレラ物語)

(書田)Whewell's History of Induction 1872 卷3講義

⑧〔Translation〕21~22年(翻訳)

"Zannen Kinosuke"(P.10) (牛・ネンキノスケ)

"The Young Philosopher"(P.14) (若<sup>カ</sup>哲學者)

"Never Pret" (ふらふらするな)

「学科課程表」に「第一外國語、講義、翻訳、會話、作文」とあり、⑧①は翻訳・作文に該当すると推定した。

⑧の(翻訳)は、物語・哲學・會話など、英文の翻訳を課題としたものであろうか。①の「物理学」のノートに中國の孝行談・日本の鬼退治・欧州の昔話、繼母に虐待されるが魔法の協力や靴の縁で王妃となる話——これは日中欧の昔話を取材しての英作文の課題。⑧で翻訳の試み。①で英文での創作力、表記力を試みさせたと思われるだろうか。

子規としては、すでに明治二十年十一月(予科第一級)で大倉是空と互いに「ゴドルヒン」の訳文を試み批評しあい、是空は出版まで企画したが、思いとどまった。蔵書中。

Godolphin (文学門小説部第三類英書)

十二月二十五日試験終了後、演説会、午後バスボール大会、夕刻同級の寄宿舎生一同今金に集合し「福引」。遠藤氏は「幽霊」、開けば黒インキ壺二個、陰気というしゃれ、子規は「西施と嫫母」、女人形と蛙(土器)、最も面白きは「伊藤大臣の夜会」、半紙一枚とゴム球、これは「フアンシー、ボール」(仮装舞踏会)の洒落といい、英語が巧みに転用されていた。(「筆まかせ」第一編「愉快」)

明治二十一年春、子規は新体詩「時鳥(西詩翻訳)」として

面目や春たちかへる 若緑杜のこするを  
我宿ととびかふなれば 佐保姫の音つれ伝ふ

使なるらん (自筆稿)「竹乃里歌」

子規の最初の新体詩は、訳詩から始まった。(五聯略)

夏季休暇頃か、英国小説家と日本小説家とを比較し、スコットは馬琴に同じく、歴史小説を主とし、リットンに似て情を写すを主とす。(「筆まかせ」第一編「英和小説家」)

翌二十二年、逍遙の『妹と背鏡』の叙辞中に議論を挿入するは日本にては始めてで珍らしく、西洋でもスコットの小説には議論なくリットンの小説にはありと指摘し(同上「妹と背鏡」)、リットンよりウラの方寧ろ春水に似たりと記したが、「上欄自注」にリットンの『ゾラも春水に似すと訂正している。(同上「ゾラと春水」)

十月七日(旧九月十三日)新海非風に伴われ、五百木飄亭が初めて子規を訪問、子規はゾラの英訳の小説を読んでいて、頗りに小説談をしている。(同上「校長の欠片」) 蔵書中。

The lady of the Lake (文学門 Poetry 部 Walter Scott 1866)

Ivanhoe (文学門小説部 Walter Scott 1864)

Rienzi (同上 Lytton 1840)

Night and Morning (同上 Lytton 1851)

Fat and Thin (同上 Emile Zola 1889)

Nana (Emile Zola 1886)

「湖上の美人」「アイヴァンホー」スコット

「リエンツィ」「夜と朝」リットン

「金持と不健康?」「ナナ」ゾラ

ノート①「Logic & Psychology Ukare-Daruma」

(論理学と心理学)(譯かれ蓬磨——子規の雅号)

②「Mineralogy」

③「なし」明治二十二年四月三日「水戸紀行」の草稿

六日 アメリカの波打ちよする(岩は城 浜は城)

「俳諧明治萬題集」四冊(写)「明治五百題」二冊

Copée's Rhetoric

Henry Reeds English Literature

〔書田〕Copée's Elements of Rhetoric 1 Philosophy 24, 52

Reeds Lectures on English Literature 1 Lit. 29, 122

A. Wylie's Notes on Chinese Literature 1, Lit. 50, 12

両書とも本文の一部を抜粋し、参考書目を掲げている。「コペーの修辭学」は、本書の第三章「The Relation of Rhetoric to Aesthetics」からの引用として、一部の誤脱を補つ、美を論ずる所を子規が抜書している。著者のヘンリー・コペーはペンシルヴァニア大学教授と、和田克司は「解題」に記している。子規がノートに突如引用しているが、コックスの授業で、前掲の三著作中か、直接講義で聞いたのであろう。コペーの文章中 imagination (想像力・構想力) や Beauty and Sublimity (美と荘嚴・崇高・雄大) などに子規は棒線を施しており、子規の虚子宛書簡(明治三十四年)中の文学論へ展開してゆくと付記している。

「リードの英文学」は the ancient Minstrelsy (古代の吟遊詩人) や ballad (民謡・物語詩) に(馬琴・小説)と付記し、参考書目に、リードの英文学史講義をウイリーの中国文学のノートをあけており、創作への意図が感ぜられる。

子規が『筆まかせ』「言文一致の利害」(第十二編)でむつかしき言葉をやめて俗語にて平たく言はれた(圓朝の話の筆記の様に)

と書くなど、講義や交友間の会話から「最简单なる文章が最面白き者なり」(「文章の繁簡」)、「帰化外国語」「童話」「昔まっご」「地口」「方言」「填字」にと、言語に関し観察を深め、展開させている。「帰化外国語」、古来からの日本語、漢語と日本語例示、「洋語」約二〇語をあげ、原語の輸入国を記している。

テーブル・ガラスコ・ガラス・インキ・マッチ・ブック・ハン

ケチ・チョッキ・サラダ・キャベツ・ラムネ(英)・シャボン・シャパン・シャッポ・ドンタク(仏)・ビール(独)・カステラ(西)・ベースボール(米)

東洋 ダンナ・アシユラ・ブツ(印)・カボチャ・シヤモ「填字」学校での戯れのいたづら書(英語を上欄に改める)

Economy 絵好 Cox 狐狗果  
Conversation 今晩聖書無 Murdock 魔毒

Astronomy 明日取蚤 Strange 奇  
兵式(海軍) 厄好大層 Chamberlain 爺婆礼無

Spain 為痛 History 火果鳥  
Holland 王懶惰 German 蛇人

Europe 洋喇叭 Asia 絵師家  
Base ball bat 米洲棒類拔刀 Egypt 絵

他人の趣味もまじえて、英語に適當に漢字をとの発想、日欧米対比しての観点が展開してきた。

⑫ (Political Economy) (政治経済学) 22年  
裏 (Geography) (地理学)

⑬ (希臘史 羅馬史 長沢氏述) 22年  
⑭ (Mathematics & Astronomy) (数学と天文学)

二十二年二月五日第一高等中学校英語会(私学)で正岡は“Self-reliance”(独立独行)と題して英語で演説をした。

本科第一部第二年(二十二年九月二十三年七月)  
⑩ (羅甸) (「筆まかせ」日本語)

子規と漱石との交遊について、「漱石全集」月報 昭和十一年八月に「予備門の生徒試業優秀表 鎌倉幸光」の巻末引用。

「正岡子規嘗て文科大学に在り、一日教授ウードと論ず。蓋し子規の文中発句を *Hot tsuku* と綴りたるを難するより起る。ウード難じて曰く、何が故に羅馬字協会の規定に従ひ *Hoku* と綴らざるやと。子規の主張する所は、発句の「ホック」たる語源を示さんとするにあるなり。ウード大いに其不可を説き、子規亦自説を固守して敢て降らず。ウード怒る。語氣急激にして子規に通せず。子規も亦激す。心あせるばかりにて、英語を以て其意を明にしがたし。席に夏目漱石あり。子規を助けて横槍を入る。是に於て子規始めて漱石を識り、漱石亦子規の才を識り、水魚の交を結んで今日に至る。」と（活文壇第六号明治三十三年四月）  
中）

御函所の面目躍如たるものがある。この場面正に山嵐、坊っちゃん以上の名組合せであろう。」

（平成七年九月子規忌）（会長）

（続く）

(資料)

## 秋山真之が水野広徳に寄せた手記

子規の友人秋山真之(一八七五—一九四五)が海軍の

後輩水野広徳(一八七五—一九四五)に寄せた手記二通

は、このたびの『水野広徳著作集』(南海放送記念出版)

には収載されず、その後の「水野広徳遺墨展」(南海放送主催)にはじめて掲載された大切な資料であるから、

同社のご了解を得て本誌に掲載させていただいた。

二、一八 於駿河湾 橋立

秋山真之

水野広徳 殿

小笠原大佐へ宜敷拜鳳聲ヲ乞フ

敵艦隊降伏当時ノ心覚

敵ノ旗艦降伏ノ信号ヲ掲ゲアルヲ認メ長官ハ直(チ)ニ発砲ヲ止  
メラレ次ニ小官ニ受降ノ為(メ)敵ノ旗艦ニ赴キ臨機応待シテ可成  
速ニ敵將ヲ伴ヒ来ルベシト命ゼラル

仍テ附近ニ漂泊セシ水雷艇(鳩ナリシト記憶ス)ヲ艦側ニ呼寄せ  
小官及通訳トシテ山本大尉(信次郎)之ニ乗ジ「ニコライ」一世号  
ニ赴ケリ近(ズ)クママニ敵諸艦ヲ見レバ何レモ多少ノ損傷ナキモ  
ノハナク特ニ「アリヨル」号ノ如キ破孔弾痕甚大ニシテ迎(テ)モ  
戦闘シ得ベクトモ見ヘズ

各艦員ハ大抵前甲板ニ集合シ戦闘部署ニ就キ居ルモノ無ク已ニ信  
号書秘密書類等ヲ海中ニ投棄シツツアリテ非戦降伏ノ意志ヲ明白ニ  
觀察スルコトヲ得タリ

聴(カ)テ「ニコライ」一世ノ風下舷側ニ着艇シ艦内ヨリ出シ呉レタル

秋山真之 (当時中佐  
後中將)

## 日本海海戦手記

一、水野の依頼によりバルチック艦隊第三艦隊の降伏直後の

模様【明治三十八年五月二十八日】を書き送ったもの

明治三十九年二月付

拝啓 先日御依托相成タル「子ボガトフ」艦隊降伏当時ノ情況ニ就  
キ別紙ノ通心覚へ丈書誌シ置候間 御推読被下タク候 尚不備ノ点  
ハ近々修補可然候

綱二縫リテ敵艦ニ上リ參謀長ニ導カレテ將官室ニ入レバ「子ボガトフ」少將汚穢ナル戦衣ノ儘ニテ出(デ)来リ鄭重ニ握手セララル此ニ於テ小官ハ直(チ)ニ山本大尉ノ仏訳ニ依リ左ノ如ク申入レタリ

一、東郷大將ハ貴下ト共ニ茲ニ惨烈ナル海戦ノ終リヲ告ゲタルヲ喜ビ且ツ名譽ノ降伏トシテ貴艦隊ノ降ヲ受クルタメ小官ヲ送レリ

就テハ貴下等ノ帯剣ハ其儘ニ帶セラレタシ

一、已ニ受降ノ上ハ貴艦隊ノ艦砲兵器等一切ノ現狀ヲ維持スベキコトヲ直(チ)ニ各艦ニ嚴達セラレタシ若シ故意ニ之ヲ毀損スルモノアルトキハ我が軍法ニ依リ処分スベシ

一、右ノ他降伏委細ノ条件ニ就イテハ東郷大將貴下ニ会见シテ協定サルベキヲ以テ可成速ニ貴下自ラ我が三笠ニ乘艦アランコトヲ望

子ボ少將ハ前日来ノ海戦終始利アラズ此戦艦隊モ最早戦鬪ノ余力ナキヲ以テ凡テ貴命ニ従フベキ旨ヲ答ヘラレタル後尚其意志ヲ各艦

ニ伝フルタメ暫時ノ猶予ヲ請ハレタルヲ以テ之ヲ諾セリ 此ニ於テ少將及參謀長ハ將官室ヲ去リ士官室ニ其幕僚ヲ会シ何カ議スル処アルモノノ如シ

待ツコト約三十分 少將先ツ入り来リテ曰ク「各艦ヘノ伝達漸ク

了レリ是ヨリ貴艦ニ赴カントスレドモ我端舟皆破損シテ用ユベカラズ願クハ貴艇ニ便乗シタシ又是ヨリ本日ノ海戦ニ戦死シタルモノヲ水葬シ又服装ヲ改ムルタメ尚少時ノ御猶予ヲ請フ」仍テ之ヲ諾セリ

子ボ少將ハ尚ホ前日来離散シタル敵艦ノ安否ニ就キ非常ニ掛念セラルルモノノ如ク頻リニ昨夜来ノ海戦ノ結果ニ就キ質問サレタリ

仍テ我が知レル丈ニ基キ相応ノ返答スルト全時(同)ニ夫レト無ク敵狀ヲ反問セシニ問ハズ語リニ「ボロジノ」「アレキサンダー」三世「オスラビヤ」ノ沈没並ニ旗艦ノ「スワロフ」タリシコトヲ邊聞クヲ得タリ

子ボ少將ハ海戦談ニ余念ナキ模様ナルヲ以テ時刻ノ移ルヲ慮リ東郷大將ガ貴下ヲ待チツツアル旨ヲ述ベテ來艦ヲ促ガシタルニ少將及參謀長ハ初テ心附キタルガ如ク倉皇私室ニ赴キ從僕ニ命ジテ礼服ヲ出サシメ之ニ着替ヘラレタリ

此時小官ハ將官室ヲ辞シテ上甲板ニ出デシガ幾モナク 子ボ少將參謀長及各幕僚礼服ニテ皆出来リ 後甲板ニ総員ヲ呼集シ悲壯ナル露語ヲ以テ涙ヲ含シテ懇ニ演説サルル処アリ多分降伏ノ已ム無キヲ訓示サレタルモノナラン

次デ簡單ニ戦死者ノ水葬式ヲ了リ一同我水雷艇ニ乗移リ 我三笠ニ來艦セリ

三笠ニ來艦後、將官室ニテ彼我兩將及幕僚相会见シ座定リ 八代大佐通訳ノ勞ヲ取ラレ降伏条件ヲ協定サレタリ

小官ハ此時艦橋ニ上リ各艦捕獲員ノ部署等ニ從事シタルヲ以テ將官室ニ還リ来リタルトキハ(其間約四十分)談判已ニ終リ彼我兩將三鞭ヲ挙げ海戦ノ終結ヲ祝サレツツアリ

其時 東郷大將ト子ボ少將ノ間ニ左ノ如キ問答アリタルヲ耳ニ挾メリ

「子將軍」貴下ハ我艦隊ノ对州海峡ニ來タルヲ予知サレタルモノト認ム 然ルヤ

「東大将」 否、然ラズ 唯（タ）多分来ルナラント推定シタリ

「子將軍」 貴下ハ何ニ基キテ斯克ノ如キ推定ヲ置カレシヤ

「東大将」 地理、天候其他ノ情况等ヨリ斯克アラザルベカラズト

信ジタルニ過ギズ

「附記」 以上ノ問答ハ単ニ傍聴シタル心算ヘニテ或ハ多少文句等

ノ相違アルヤモ知ラズ 但シ 意義ニハ大差ナシ

秋山真之

## 『戦影』序文

水野広徳は戦影（旅順海戦私記）を大正三年に出版（一

海軍中佐の匿名<sup>11</sup>但、この時は当局の許可を受ける）した

が、その序文を、故郷松山の先輩秋山真之に依頼したもの。

但、何故か用いられていない。

大正二年四月付

予年少の頃 予の父は固く小説を見るを禁じたる代りに和漢の通

俗史のみを読むを許せり 故に予は好んで太平記又は漢楚軍談など

の如きものを繕き 未だ学ばずして略ぼ和漢の盛衰史に通じ後年に

益したること少（な）からざりしを喜ぶ

惟ふに通俗史の長所は史実の関連を失はずしてその乾燥なるもの

をば趣味に読過せしむるにありて 浅くとも広く世俗を益する点に  
於いては慥かに正史に勝るところあるが如し

戦友水野少佐 此に見る処ありてかその惨澹たる実歴に回想し

その奇抜なる文才を發揮して面白可笑しく日露戦役に於ける海上の

史実を描かれ曩に此一戦を著はし今又『戦影』の作成る。

之（れ）を繼くに過去の事績を知悉せる我等すらも尚はその文勢

と筆力に誘はれて翫読巻尾の到るを忘るるを覚ふ

予は少時の読史を懐いて本著の効益不少べきを信じ 需に応じて

茲に其の所感を記す

大正二年四月

秋山真之

雲林追憶の詩 — 「雲林遺稿選釈」付録 —

谷 光 隆

以上で、「雲林遺稿選釈」の本文を書き終えたが、以下、参考のためこれに関連ある別人の詩作若干首を付載しておこう。

その第一は、遺稿の巻頭に掲げられた内藤素行（南塘）及び近藤元晋（小南）の奉弔、奉挽の詩であり、第二は、遺稿そのものには関係ないが、筆者の先代信實（后山）が雲林の居宅・柳影水光楼について詠んだ詩である。そして最後に、近藤氏と信實とが後年西山で邂逅した際に詠んだ懐旧唱和の詩を披露し、これをもって雲林追憶の一文を了ることとする。

註 忠貞慎勿墜家声 忠貞 慎んで 家声おとを墜おとすこと勿れ

(1) あきらか。はつきり。

(2) 伊予松山城。

(3) 詩人仲間。詩人の団体。詩会。

(4) 後輩。後進。

(5) 「月白風清」の句は、蘇東坡の後赤壁賦に見える。

(6) 我は、峨に同じ。山の高くけわしいさま。

(7) 洋は、水の盛んなさま。

(8) ねんごろ。丁寧。懇懇に同じ。

奉 弔

弔し奉る

訃音接手字分明

訃音ふいん 手に接して 字分明がんべい ①

慟哭天涯向予城

慟哭 天涯 予城② 向ふ

多年詩社称先輩

多年 詩社 先輩を称し

幾度酒筵容後生

幾度 酒筵 後生を容る

月白風清新涕淚

月白 風情⑤ 新たに涕淚す

義山洋水古交情

義山⑥ 洋水⑦ 古しく交情あり

一語殷勤告令息

一語 殷勤いんぎん 令息⑧に告ぐ

内 藤 素 行

奉挽雲林浦屋先生

雲林浦屋先生を挽し奉る

其一

柳凋水咽寂烟扉

柳凋しやうみ 水咽ひびくふ 寂烟の扉

池台唯見細鱗飛

池台 唯見る 細鱗③の飛ぶを

自今月白風清夕

自今 月白 風清の夕

彷彿遊神騎鶴歸

彷彿たる 遊神④ 鶴⑤に騎のつて帰れ

註

(1) ひく。輓に同じ。葬式のとくに柩を載せた車を引くこと。  
挽歌・挽詩は、死者を哀悼する詩歌。

(2) 咽は、咽の俗字。

(3) ちいさいうろこ。転じて、小さい魚。

(4) 塵俗を脱離し、隱居して仙となった者。また、死亡した者。

(5) 中国の伝説では、仙と成り道を得た者は多く鶴に騎るとい  
う。因みに、鶴馭は、仙人の乗物。また、死者の乗輿をいう。

其二

半夜文星光忽摧 半夜<sup>①</sup> 文星<sup>②</sup> 光忽ち摧け  
凄風冷露蕃声哀 凄風<sup>③</sup> 冷露<sup>④</sup> 蕃声<sup>⑤</sup> 哀しむ  
西山長剩一輪月 西山<sup>⑥</sup> 長しへに剩す 一輪の月  
空照新阡表上来 空しく 新阡表上を照らし来る

註

(1) よなか。夜半。

(2) 星の名。文運を主る。また、文昌星という。

(3) 凄は、さむい。つめたい。

(4) こおろぎ、又は、まりぎりすの鳴く声。

(5) 松山西郊の大峰台の通称。墓はその東麓の宝塔寺境内に在  
る。

(6) 阡は、墓みち。表は、墓前や墓道に建てる石ぶみ。

谷 信貴

上柳影水光楼

柳影水光楼に上る

園林既斂乱蛸声

園林 既に 乱蛸<sup>①</sup>の声を斂<sup>②</sup>め

孤杖尋師乘晚晴

孤杖 師を尋ねて 晚晴に乗す

柳影漸兼簾影動

柳影 漸く 簾影を兼ねて動き

水光忽与月光明

水光 忽ち 月光と与に明らかなり

座無些熱扇相忘

座に 些熱無くして 扇を相忘れ

鼎有幽音茗也京

鼎に 幽音有りて 茗也京<sup>③</sup>

叙尽平生無限意

平生無限の意を叙べ尽し

不知柱漏下三更

柱漏<sup>④</sup>の三更に下るを知らず

雲林云、吾家晚景、写生不漏、弊園生色、前聯句法、  
流暢可喜

註

(1) 蛸は、せみ。

(2) 茶の別名。

(3) 柱時計。

(4) 子の時。午後十二時から午前二時までの間。よなか。

柳影水光楼即事

同

恰宜柳影水光名

恰も柳影水光の名に宜しく

漫把幽閑遺此情

漫に 幽閑を把りて 此の情を遺る

婦鳥有声書院外

婦鳥 声有り 書院の外

滿衫涼氣月方生

滿衫<sup>⑤</sup>の 涼氣 月方に生ず

雲林云、吾舎夏夜之景、写得有趣、多謝々々

(1) その場のことを詠ずる詩題。

(2) おこたる。慢に通ず。

(3) 衫は、ひとえ。単衣。

同

雲林先生逝後、  
其幽迹属他有、  
而不復存旧觀  
也、今随所追  
憶、聊作十絶  
句

雲林先生の逝後 其の幽迹①他有に  
属し 復た旧觀を存せず 今追憶す  
る所に随ひ 聊か十絶句を作る

風暖桃花映碧淪 風暖かにして 桃花 碧淪②に映ず  
武陵源上似尋春 武陵源上③ 春を尋ぬるに似たり  
老師性癖愛仙境 老師 性癖 仙境を愛す  
非是平生擬避秦 是れ 平生 避秦ひしんに擬なぞへるに非あらざらんや

註

(1) 奥深く静かな住居跡。

(2) あをみどり色のさざなみ。

(3) 武陵桃源に同じ。晋の陶淵明、桃花源記を作り、太元中(三七六一三九六)、武陵の漁人が溪に沿って行き、偶然桃花の林に入り、更に源にさかのぼって一仙境に至ったことを記

す。すなわち武陵郡沅南県の地に当たると言われるから武陵桃源という。今、中国湖南省桃源県の桃源山。転じて、世間とかけ離れた別天地をいう。

(4) 秦の暴虐な政治をさける。後世、乱を避けることに用う。桃花源記に「先世避秦時乱、率妻子邑人、来此絶境、不復出焉、遂与外人間隔」とあり。

木末芙蓉紅綻時 木末①の 芙蓉 紅綻ほたつらひるの時  
秋涼早已襲書帷 秋涼 早く已に 書帷を襲ふ  
夢辺猶記穿幽逕 夢辺 猶記なほす 幽逕を穿り  
香露灑衣尋老師 香露 衣に灑そそいで 老師を尋ねしを

註

(1) こすえ。木の末端。

(2) 錦葵科、黄槿属の落葉灌木。きはちす。高さ三、四尺。葉は掌状を呈し、長い葉柄を有して互生す。花は大形、紅色。白色等の美しい花冠を有する。中国の原産。我が国では觀賞用として栽培す。はちすばな。木芙蓉。因みに、芙蓉といえは普通は蓮の花をいうことが多い。

(3) 書斎のとばり。

(4) おぼえる。

(5) 静かなこみち。

雨霽池辺寂午櫺 雨霽れて 池辺 寂午しやくごの櫺らう

垂楊垂柳挽涼風 垂楊 垂柳 涼風を挽く  
 林蝉忽被稚童捉 林蝉 忽ち 稚童に捉へられ  
 噫々餘声咽掌中 噫々たる 餘声 掌中に咽ふ

註

- (1) しずかな昼時。  
 (2) れんじまど。へやの格子まど。  
 (3) 蝉の鳴き声。噫は、声の急なさま。

蟠屈樹奇看竅痕 蟠屈 樹奇 竅痕を見る  
 紫薇花発丘幽園 紫薇 花発けは 幽園を庄す  
 遠眺百日猶堪指 遠く眺むれば 百日 猶指さすに堪へたり  
 粧点城南夫子門 粧点す 城南 夫子の門

註

- (1) うろ。中がからになっている所。竅は、あな。  
 (2) 花木の名。さるすべり。百日紅。  
 (3) 飾りたてる。  
 (4) 春秋時代、太子・大夫・先生・長者を呼ぶ尊称。孔門の弟子が専ら孔子を称してから、後世、師の専称となる。

境占溪村幽邃中 境は 溪村幽邃の中を占め  
 寄蹤尤極韵流翁 寄蹤 尤も極し 韵流の翁  
 訪来暨傍柴扉立 訪ね来って 暨く 柴扉に傍りて立つ  
 瑟瑟孤衣蘆荻風 瑟瑟 衣を払ふ 蘆荻の風

註

- (1) 蹤は、あしあと。立ち寄る。  
 (2) 韵は、韻に同じ。風雅。  
 (3) 暫に通ず。  
 (4) 瑟瑟、淅淅は共に風の音。  
 (5) あしとをぎ。

註

- 新樹緑流過雨餘 新樹 緑流 過雨の餘  
 夕陽如画射簾裾 夕陽 画の如く 簾裾を射る  
 倦飛有影是何鳥 飛ふに倦きて 影有り 是れ何の鳥ぞ  
 忽駭唳喞波際魚 忽ち 唳喞波際の魚を駭かす
- (1) 一しきり降る雨。とおり雨。むらさめ。  
 (2) 陶淵明の婦去来辞に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」とあり。  
 (3) あぎとう。魚が水面に浮かび出て口を動かし呼吸する。

註

- 也向池汀廃午眠 也 池汀に向って 午眠を廃す  
 筠牀下得碧滴漣 筠牀の下 碧滴漣を得たり  
 稚魚駭去駛於箭 稚魚 駭き去って 箭よりも駛し  
 寸々再浮閑坐辺 寸々 再び浮ふ 閑坐の辺
- (1) 筠は、たけ。牀は、ねだい。こしかけ。

(2) 薄も薄も共にささなみ。

(3) 去の本字。

(4) 少しづつ。

林樾雪粧奇景加

林樾<sup>ついで</sup>雪粧<sup>ついで</sup>ひて 奇景加はり

晚寒釀得滿天花

晚寒 釀し得たり 滿天の花

柴門剥啄偕高雅

柴門の 剥啄<sup>ひげ</sup> 偕に高雅にして

已有履痕留偶又

已に 履痕<sup>ひげ</sup>の 偶又<sup>い</sup>を留むる有り

註

(1) はやしのかかげ。樾は、樹蔭。

(2) 音の形容。こつこつ。訪問者の足音や戸を叩く音。

(3) げたの齒のあと。

(4) 偶は、偶数。又、ならぶ。そろう。又は、また。分岐。

絳帳講書無碩老

絳帳<sup>し</sup> 書を講じて 碩老<sup>じ</sup> 無く

綺筵勸醉有嬌柔

綺筵<sup>し</sup> 醉を勧めて 嬌柔<sup>じ</sup> 有り

而今何耐異喧寂

而今<sup>し</sup> 何ぞ耐へん 喧寂を異にするを

庠塾变为翡翠楼

庠塾<sup>し</sup> は 変じて 翡翠<sup>し</sup>の楼と為る

註

(1) あかいとばり。後漢の大儒、馬融が高堂に坐し、絳帳を垂

れ、生徒を其の前において教えた故事。転じて、師の席、又

は学者の書齋をいう。

(2) 年長けて徳の高い博士の士。

(3) あやぎぬを張った美しいむしろ。

(4) なまめかしくやわらか。

(5) 今にして。

(6) まなびや。庠は、学校。

(7) 翡翠は、青々と艶やかに美しいこと。又、美玉の名。緑色

の硬玉。翡翠楼は、ここでは料亭「亀乃井」を指す。

邀月清譚喚茗甌

月を邀へて 清譚<sup>たん</sup> 茗甌<sup>めいおう</sup>を喚ぶ

曾憑柳影水光樓

曾て憑る 柳影水光樓

接他嘗咳如前日

他の嘗咳<sup>か</sup>に接せしは 前日の如きも

夢裏已過三十秋

夢裏<sup>むら</sup> 已に過ぐ 三十秋<sup>しゅう</sup>

註

(1) 世務をすて俗を離れた清淨の談話。

(2) 茶を沸かすかま。茶がま。

(3) 憑の俗字。

(4) 此の対。彼の称。

(5) せきはらい。しはぶき。又、其のこえ。

(6) 夢の俗字。

(7) 昭和五年、雲林の三十三回忌に当たり、親族十余人（外に

門人の紙商木原屋主人）が思い出の宅址、料亭亀乃井に会し

た。「三十秋」とはこの時点に立っての回想である。詩題中

に、「復た旧観を存せず」とあるが、筆者の父（義之）もこの日帰宅した後、昔の面影はもう無かったと言っていた。そ

の言葉が今もかすかに筆者の耳に残っている。

西山与谷兄晤

西山にて谷兄と晤す<sup>①</sup> 近藤 元晋

散行花影鳥声中

散行す<sup>②</sup> 花影 鳥声中

級、林園曲徑通

級々たる<sup>③</sup> 林園 曲徑通す

邂逅相逢頭共白

邂逅<sup>④</sup> 相逢へば 頭共<sup>⑤</sup>に白し

菜黄香裏話春風

菜黄<sup>⑥</sup> 香裏 春風に話す

註

(1) 遇う。対面する。

(2) 気ままに歩く。

(3) 幾段にもなっている。

(4) であう。期せずして遇う。

(5) 野菜のきいろい花。

西園与小南兄

西園にて小南兄と晤し、韵に次す 谷 信貫

晤次韵

爛晴三月碧山中

爛晴<sup>①</sup> 三月 碧山の中

淡々霞生細逕通

淡々 霞生じて 細逕通す

何料弊園留玉趾

何ぞ料らんや 弊園に 玉趾<sup>②</sup>を留め

吟袵吹動菜花風

吟袵<sup>③</sup> 菜花<sup>④</sup>の風に吹動せんとは

註

(1) 拙宅の庭が家屋の西側に在ったからいう。

(2) 爛は、あきらか。かがやく。

(3) 人の足の敬称。おみあし。

(4) 詩人の衣服。

(5) 野菜の花。

補註

拙宅は、大正十五年より昭和五十四年まで西山の南麓、朝日八幡神社の参道に隣接して在った。筆者の記憶にして誤りなければ、往年近藤氏が北予中学校の生徒とともに西山に遊び、解散して帰途についたとき、拙宅の門前において信貫と邂逅したので、それは恐らく昭和初年のことであつたと思う。小南詩の第四句に「菜黄香裏春風に話す」とあるが、その話柄が両者共通の関心事、すなわち雲林とその周辺に関するくまぐさの追憶であつたことは察するに難くない。拙宅には近藤氏が右の詩を達筆で認めた朱野の八行書が遺つているので、とくにこれを紹介し綴々紙幅を費やした雲林遺稿選釈の筆を擱くこととする。

因みに、現在、子規記念博物館内に復元された愚陀仏庵の屋根瓦は、廢屋となつたこの拙宅の屋根瓦である。

(奈良市右京三丁目一六一〇在住) (六云員)

7	6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4	3	2	〃	1	頁
〃	上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	下	〃	上	下	上	段
13 1 2 ・ 3 ・ 4	京 廟	開 係	他 銘曰	愛 慕之	五 十 八	疾 殉于家	居 其間	〃	愛 媛 眞 出 版 協 会	正 <sup>ま</sup> 啓 <sup>き</sup>	可 か ず	友 誼	誤
13 1 2 ・ 3、 14 1 1 ・ 3 ・ 4	宗 廟	関 係	為 銘曰	愛 慕之	五 十 八	疾 殉于家	居 其間	〃	愛 媛 眞 出 版 協 会	正 <sup>ま</sup> 啓 <sup>き</sup>	可 か ら ず	交 誼	正

子規会叢書

子規 敬慕 — 松山子規会例会講演 —

B 6 版 二七一ページ 一、五〇〇円

子規こそわがいのち — 越智二良隨筆集 —

B 6 版 三四六ページ 一、八〇〇円

「草愁」など — 越智二良創作集 —

B 6 版 三五四ページ 一、八〇〇円

しのぶ草 — 亡き妻を偲ぶうた(越智二良歌集) —

B 6 版 二八〇ページ 一、五〇〇円

送料 各巻とも三一〇円

松山子規会

松山市末広町正宗寺内  
郵便振替 徳島二一八六八

# 天保の女流俳人長谷部菊圃について

伊 藤 隆 志

## 一 菊圃の略歴

### 1 通女が結婚するまで

長谷部菊圃は、天明八年（一七八八）松山藩士目下宗女の次女として生まれた。兄に伯巖、弟に津田半助がいる。名は通といつた。

天明といえば大飢饉を思い出すが、全国的に百姓一揆が起こったり、一方では商品経済・貨幣経済の発展から、大商人が資金を蓄えて武士階級を根底からゆさぶり始めた時代だった。

松山藩では、十代定則から十一代定通の時代である。定通は文化六年、六歳で藩主となったが、治政二十七年の間に十四回も不作が続いたといわれ、藩士の俸祿も五割程度に落とされていた。

政治や経済の面では、このようにきびしい時代であったが、俳諧の世界では、栗田樗堂が四十歳から五十歳の頃で、小林一茶が松山を訪れた寛政七年は通女が八歳の時にあたる。当時、松山あたりの俳壇は活気づいていたことであろう。

通女の幼少時代、どのような生活を送っていたかはよくわからないが、目下家は藩の祐筆を勤めており、伯巖は儒者でもあり、そうした家柄の中で、幼少より和歌や俳諧を含めて一応の教養を身につ

ける環境のもとで育ったと思われる。

通女が小松藩の長谷部映門の所に嫁ぐことになった経緯は大よそ見当がついている。

映門の父、長谷部寛来は、松山藩矢部忠明の次女を後妻に迎えていた。享和二年の映門の記録によると、松山藩士梶原保次郎が江戸定府となるので、その挨拶に松山へ行き、矢部家、松本家へもまわり、また栗田樗堂にも面接したことになる。

また、文化二年に寛来は体調をくずし、道後湯治に出かけて、暫く松山に滞在した。当時寛来は五十一歳で隠居を望んでいたもので、この頃松山の縁戚知人との間に映門の結婚の話が出ていたものと思われる。

通女が長谷部映門のもとに嫁いだのは、文化三年二月で、通女十九歳、映門二十五歳であった。

### 2 藩政に献身する主人を助けて

映門は、結婚二箇月後の四月には早くも参勤交代で出府せねばならなかった。通女は主人が留守の、馴染みのない長谷部家で、新嫁としての勤めを果たさねばならなかったが、それは大変な苦勞であ

つたと思われる。

結婚後、通女の産はおそく、七年目の文化十年二月に長女が誕生した。しかしこの年の四月にも映門は出府せねばならなかった。

通女は初めての産であつたが、主人が留守の屋敷で、家庭のきりもりから乳児の世話と心細い思いをしたことであらう。

長女が生まれて五年目に次女を出産するが、その子は年内に亡くなり、次の年には七歳になつたばかりの長女まで失つた。その後子供はなく、通女にとってこれは大変な痛手であつただろう。

夫の映門は、十九歳で中小姓となつて以来、参勤交代にはそのつどお供をし、家庭に落付く暇もない生活が続くが、近習頭、御番頭となつた四十歳ころからは漸く藩内に落付き、疲弊した藩の財政立て直しに献身するようになった。陣屋の南に天神池を築造したり、藩札の再発行をしたり、松山藩から一千両を借用したりもしている。

松山藩が苦しい財政の中から資金を融通した裏には、矢部家や日下家等の縁戚関係や知人の協力があつたものと考えられる。

映門はその後大目付となり、代官を兼務し、御勝手筋諸事取締役となつて、自ら徳米の一部を返上し、上米を奨励したり、俵約合を出す一方、河川や溜池の改修、殖産興業にも意をそそぎ、一万五千両におよぶ藩の赤字克服につとめ、数年後には余裕金六千両を蓄えて財政再建に成功した。

しかし彼は、それほど頑健な身体ではなかつたので、健康を維持するために苦勞した。

彼は馬廻役をして馬術の免許をとり、馬を使うことが多かつたこ

ともあり、早くから痔を悪くしていた。三十一歳の時には、下血不快が続き、半月をかけて道後湯治に出かけたりしている。そのような身体で重責を担つて勤めに献身する夫を助け、通女はよく長谷部家を守つてきた。

### 3 菊圃として俳諧の道へ

天保初年、五十歳をすぎた映門は、体力の衰えを感じ、甥を養子に迎えていたこともあつて、隠居を希望するようになった。同時に若いころから心引かれていた俳諧への思いも強かつた。

そして天保六年春、かつて自分が築造した天神池のほとりにさやかな別荘「静佳園」を建て、ここを俳諧修業の根城にすることになった。天保九年には念願の隠居も許され、それ以後は妻の通女と共にひたすら俳諧の道に没頭した。通女が「菊圃」という俳名を使い始めたのはこの頃からで、兄の伯巖に命名してもらつたものといわれている。

静佳園が完成すると、早速近藤篤山や黒河石漁・佐伯茶隣など近隣の雅客の祝福をうけ、またその八月には田川鳳朗が道後湯治の帰りを二人の弟子と共に逗留して俳諧一座をひらくなど、静佳園をめぐって諸国の俳人が次第に参集するようになった。

菊圃は映門にかしらずいて、そのつど接待に、俳諧への参加に、多忙をさわるようになる。しかし、映門の俳人としての活躍も十年にすぎず、彼は嘉永元年、菊圃が還暦を迎えた年の正月に他界した。

菊圃はその後、映門の遺志をつぎ、「静佳園主人」として、映門以来交流のあつた諸国の俳人や、伊予近辺の人びとも旧情を暖め、

各地から届いた発句を『文音句留帖』にまとめたり、奉納額の判者になったり、姪の玉鶯に句評を頼んだりしながら俳諧の道を歩み続けた。

菊園が亡くなったのは、文久三年（一八六三）二月、七十六歳であつた。

## 二 菊園の俳諧

菊園の残した俳諧の殆どは、映門の遺稿「静佳園草稿」の中にまとめられている。

その他、玉鶯に句評を頼んで書き送つたものや、色紙・短冊、あるいは当時板行された発句集に散見されるものもあり、それらを含めておよそ六百句程度で、俳諧の連歌は長短合わせて三十巻余りとなつている。以下いくつかにふれてみたい。

### 1 松山への旅（天保七年）

榎三里の山中にて三句

駕籠昇の足くるひけり雉子の声

菊園

花盛り黙つて通る山路かな

〃

菜の花のまだらに咲や山の畑

〃

大林精舎庭前のおもひき、山野海浜そこはかとなく佳景をつくして何たらずといふことなし。見ぬもろこしの沙汰なれど彼の瀟湘の八ツのながめもこの一味の風光にやはおよぶと眼にあまるばかり、如何なる人かこと葉を出さん。

兼て約せし事ありとて方丈に居たまはぬこそ口惜けれ。さすが

に饗応も念ごろなる留守居の僧に對して

加減よき茶を吞ませたるかすみかな

映門

同寺にて

入りかゝる日をきりしまの盛りかな

菊園

東ノ野新助宅にて

青麦の向ふに黒し御城山

映門

東野御茶屋吟松庵にて

此花の盛りがゆかしきつばた

菊園

大年寄藤岡亭の牡丹見にいざなはれは句をぞれて

雪霜の手入れも見ゆる牡丹かな

映門

おなじく

蒼やうにこと葉の足らぬ牡丹哉

菊園

（『静佳園草稿』より）

この時の松山行きは目的が何であつたかさだかではないが、この年は菊園の父宗玄が亡くなる前年であり、老父の見舞もかねていたのではなからうか。

丁度この時、京都の祭魚という俳人が旅亭に訪ねてきて、映門と表六句の両吟を残し、また馬雪との両吟も残している。

松山へは、この前後にも幾度か出向いており、親戚に掬月・玉鶯夫妻や半助・蘭友夫妻もいたので、これらの人びとを含めて松山方面の俳人との関係は親密であつたと思われる。

## 2 俳諧の連歌

菊園は映門の妻として、接待役もかねて俳諧の場には同席し、ま



- 6 海士の子に年問ふてみる潮干かな
- 7 軽くと子供こどもの走る袷かな
- 8 親に添ふて岩下りかねる鹿子かな
- 9 乳をやめて何か立聞鹿子かな
- 10 這かゝる子を抱のける蚊遣哉
- 11 赤い画を悦よろこぶ児こどもの扇哉
- 12 稚ちきが結句上手な踊哉
- 13 をどり出て児のむしり来る紫苑哉
- 14 誰のぞと児の来て覗く砧哉
- 15 走るとて児のこはがる炭火かな

一番と三番は、子を「抱く」で始まっている。四番と五番は「手」からこぼす蓮「手にもたせる風」で、幼児の手が見える。十番は「這いかかる子を抱きのける」、十一番は「赤い絵の扇子をよろこぶ」とあるが、このような見方、詠み方は、子を育てた経験のある女性でなくてはできないであろう。幼児を早々に失った菊園の心が察せられて哀れである。

#### 4 菊園のやさしさ

子を失ったから子供をよむということだけではなく、菊園は心のやさしい女性であったとみえて、女らしさ、やさしさのにじみ出ている句が各所に見られる。ここにそのいくつかを並べてみた。

- 1 元朝や拾ふて除ける雪の塵
- 2 おなじうたかへしてたたふ手毬哉
- 3 むすぶ手に散る梅たまる流れ哉

- 4 もらひ人の気儘に折らす野梅かな
- 5 戸口から猫呼ぶ里の霞かな
- 6 鶉の戸を両方あけて春の風
- 7 春雨の溜りをあびる雀かな
- 8 水際に（鳥）貝並べたる蛙かな
- 9 土の儘紙に包むや初葎
- 10 散る花にちよいと列たる小貼かな
- 11 動かして居る魚のあり杜若
- 12 早乙女の顔美しや笠のひも
- 13 よけよけも客に蚊遣をあふぎけり
- 14 鐘の聲すらりと通す薄かな
- 15 山茶花や人がらもよき尼が軒

一句、元日、雪の上の塵を手でつまんでのけるしぐさ。二句、同じ唄を返して相手を讀える毬つき。三句、流れる花びらを手で掬いとるしぐさ。それらは女性ならではのやさしさがにじみ出ているが、このような所が菊園の句の特徴となっている。

#### 5 「静佳文音句留帖」

菊園の残したものの一つに『静佳文音句留帖』がある。これは諸国から届いた書簡や印刷物から発句とての作者名を採録したものである。それは映門の遺志をついでまとめられたものだが、嘉永三年から文久元年までの十二年間続けられ、三百四十三人の二千八百五十二句を二巻にまとめている。映門の没後二年間は、彼が遺した『静佳文音句帖』第六巻の余白に菊園が書きついでいるので、その分を

加えると、彼女の記録したものはもつと多くなる。

ここに載せたのは、嘉永元年から文久元年までに菊圃が書きとめた松山の人びととその句である。

因阿 渡辺 七郎 水音の寝耳に寒しはつきら

鶯居 奥平 弾正 蝸牛角いっぱいの世界かな

佳笑 村瀬賢之助 山眠る中から牛の吼にけり

可梅 西村氏 裏表から燕来る磯家かな

掬月 石原氏 寐静まるうへや漁村の盆の月

玉燭 掬月室 裸木の透間に白し冬の月

葵笠 岡田屋吉藏 雁来るや月も夜に入る湖のうへ

春蠟 井門 伝作 水呑に木樵も出たり閑古鳥

少鷺 春 蠟 室 朝かはや翌咲はなのあればこそ

雪芝 津田 半助 移り来て月も匂ふや軒のうめ

馬雪 茶や 十蔵 ほかの樹に開をもたせて散るさくら

黙翁 町 や 掌や仏浴ふた湯のあまみ

映門は、天保六年から亡くなる前までこの仕事を続け、それを六巻にまとめたが、その総数は七百六人、七千六百句にのぼる。そのうち伊予の俳人は七十七人で八百六十九句となっているので、菊圃の分を合わせると百人に近く、千四百句にあまる。

映門の生前中からみると、菊圃の俳壇における交遊は少なくなっているが、彼女はつましく節度を保ちながらも俳諧の道をすてなかつた。

こうしてまとめられたこの記録は、当時の諸国俳人の人名録とも

なり、また各地俳人の分布や当時の俳壇の動静を伺う上でも貴重な資料となっている。

菊圃は映門の三周忌にあたり、彼の遺稿を『別れ霜』乾坤二巻にわけて板行した。一卷は映門の句集であり、他は『静佳文音句帖』から採った諸国俳人の句集である。この句集は梅之本為山の手を借りて編集したもので、為山とはその後も親しく接していたとみられ、『句留帖』にも彼の多くの句が採録されている。

### 三 江戸時代の女流俳人

菊圃のまとめた『静佳文音句留帖』に出ている伊予の俳人の中で、女性はずかに二人である。現在の俳壇でみると女性の方がむしろ多く、結社を主宰する女流も珍しくない。しかし江戸時代の女性が俳壇の道に入るといふことは、それ程容易なことではなかつたのであろう。

菊圃をはじめ玉燭や少鷺、蘭友にしても、彼女たちはそれぞれ俳人である主人に従って句作を続けている。家庭において主人の理解と協力がなければ、それは不可能であつたと思われる。

有名な加賀の千代女には、結婚説と不婚説とがあるが、後に尼となつて俳女としての道を買いた。元祿の四女流といわれる智月・捨女・秋色・園女も、それぞれ夫と共に俳諧の道を歩んだ。智月は養子にした弟が、芭蕉の門人乙州である。そして彼女たちは、主人と死別した後、尼僧となつて俳諧の道を極めていく。それぞれの事情はあるだろうが、藩政時代に女性が家庭にありながら一つの道を極

めるという事が、いかに困難であったかを知る思いがする。

そういう中で、内にあつては藩士である主人の激務を支え、また夫を援けて共に句作にはげみ、主人亡き後もその遺志をついで俳諧の拠点「静佳園」を守り、老後を俳諧の道に生きた菊圃の生涯を、私たちは改めてふり返つてみたいのである。

#### 四 子規山脈の背後にも光をあてよう

一般に天保の俳諧は月並でダメというレッテルをはられてきた。

『伊予俳諧史』（影浦勉著）によると、天保時代は「俳諧史の上に墮落期を現出するに至つた」とされ、「全く月並調の拙劣なもの」で、「その価値はほとんど問題にならず」とある。（一五五頁）

こういう捉え方は、通説になつていて、それは子規の俳句革新運動以来の論調でもある。

子規は、天保の俳壇を代表するとされていた蒼虬と梅室について、「彼らには俳人の資格なし」ときめつけている。

ところが、別の所ではこういつている。「天保の俳諧を一変したるは、実に成田蒼虬の功なり。功も亦た大なり」。つまり、子規はその論点に応じて評価をかえているのである。

子規は「写生」の説を標榜した時、自説を鮮明にするために、その対極に天保の俳諧をおいて、これを傍若無人にきりすてた。これは短歌革新の時も同じで、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」といつている。このくらしい言わねば、人びとは驚かなかつたらうし、革新運動の旗あげにはならなかつたらうから、

その意図は理解できる。しかし、この論調を我われは一面的に受けとり、天保の俳諧や古今集を今に価値のないつまらぬものと考えている。だが、これでは子規の真意を正しく理解しているとはいえないのではないか。

『伊予の俳諧』で星加宗一氏は次のようにいつている。「天保の俳諧等に至つては、ろくに読まれもしないで、十把一からげにやつけられてしまふのを気の毒に思う」「時勢の風潮などに支配せられてできふできはあつても、たれしもが己が最善を尽くして作句していたに違ひないことを思ふ時、一説の労苦をおしんではならない」

#### (二頁)

つまり、じっくりと素直に先人の作品をよんでもらいたいというのだが、ここには彼の真面目な人間性が出てゐる。勿論、批評は批評として厳正でなくてはならないが、先輩・故人の作品に向かうには、このような態度が必要であらう。

俳句の世界において、よく「子規山脈」という言葉が使われる。

それは、子規の「写生」の説をかかげ、「ホトトギス」を中心とした流れで、虚子・碧梧桐から鳴雪・感骨・極堂など、それから昭和に入つて、草田男・波郷や篠原梵などと多士濟々で、峯々は婉婉と高く、今や伊予は「俳句王国」といわれるまでになつてゐる。

こうして、子規を一個人としてではなく、彼を一つの頂点とする山脈——歴史として捉えることは大切だが、それは主として子規以後の俳句界について言われており、それが子規以前から続いている事が忘れられてゐる。山脈の前面だけに光があてられ、その背後が

影になっているのである。

子規は一日にして生まれたのではなく、それ以前の俳諧の歴史を背負って子規の存在があるということである。

このように「子規山脈」を考えるなら、我われは子規以前の俳諧史にあらためて光をあてなければならぬだろう。

それは、元禄時代の松平三嘯や久松蘭山あたりまでさかのぼらなくてはならないし、その後連綿として、あるいは栗田樗堂に至り、

また芭蕉家を建てて正風復帰を唱え、時雨会を毎年続けてきた長谷

部映門や菊圃にもつながるものであろう。このような流れが子規以前に存在したことを理解しなければ、「伊予の子規」「松山の子規」を歴史的に評価することにはならないと思われる。

今日の「子規山脈」の姿、あるいは「俳句王国伊予」の存在も、多くの先輩たちが宮々と築き上げてきた俳諧の歴史があったからだと思うのである。

(平成七年十月例会) (周桑郡小松町新屋敷)

## 付長谷部菊圃年譜

年号(紀元)	年齢	菊圃事項	映門事項
天明8年(一七八八)	一	松山藩日下甚五左衛門篤の次女として出生。 名は通。伯巖の三歳下の妹。	映門七歳 当時大飢饉あり。
文化3年(一八〇六)	一九	二月二十八日、小松藩長谷部義正(映門)と結婚。	映門二十五歳。翌年父の隠居により家督相続。
文化8年(一八一一)	二四	十一月、映門と舅、義弟と共に金毘羅参詣。	馬廻役(白石)となる。この春出府。
文化10年(一八一三)	二六	二月、長女お豊出生。	映門三十歳。四月駿府加番を終え帰国。
文化12年(一八一五)	二八	舅寛永遺暦を祝う。	映門三十二歳。出府。江戸で千代尼句集を写す。
文政元年(一八一八)	三一	七月、次女出生。間もなく死亡。(翌年長女死亡)	映門三十四歳。(翌年出府)
文政5年(一八二二)	三五		映門三十七歳。 映門四十一歳。近習頭御番頭。天神池を築造。 藩札発行。松山藩より千両借用。俟約令。

文政7年(一八二四)	三七	舅舅来古稀を祝う。(翌年歿)	映門四十三歳。大目附、御帖面筋取調被仰付。後に代官心得、お勝手筋諸事取締となる。
天保5年(一八三四)	四七	五月、馬亮清浄忌追善俳諧に通女として参加。その後「菊圃」の俳名を使う。	映門五十三歳。代官心得御免、御徒士頭役となる。
天保6年(一八三五)	四八	六月、静佳園完成。鳳朗(江戸)、六窓(江戸)、晨支(信州)、都麦(観音寺)、蘇山(越後)その他近隣の俳友多数来訪。俳諧六卷、発句三十二	映門五十四歳。「静佳園草稿」「静佳文音句帖」等を記し始める。
天保7年(一八三八)	四九	春、夏、夫と共に松山に行。大林寺、東野吟松庵、藤岡亭等にて句あり。冬、時雨会に出席する。五獅子(讃岐)、都麦、墨泉(北野)、釜魚(浪華)凡鳥(淡海)、千崖(京)、黄州(播州)等が来訪。俳諧四卷、発句七十。	映門五十五歳。養子義彦が江戸にて病死。義彦の弟義敬(友作)を改めて養子に迎える。
天保8年(一八三七)	五〇	千崖、雲泉等が来訪。俳諧八卷、発句六十七。	映門五十六歳。俳諧十八卷、発句百十二。
天保9年(一八三八)	五一	千崖、有節(京)、青隠(大坂)、素玉(因州)、初六(能登)等が来訪。俳諧四卷、発句四十七。	映門五十七歳。俳諧十七卷、発句百十六。隠居を許され甥の友作が相続する。
天保10年(一八三九)	五二	春、松山後楽亭にて句あり。冬、翁塚造立記念俳諧下巻に参加。有節、桃五(越後)、晨支、茂権(丸龜)等くる。俳諧二卷、発句七十四句あり。	映門五十八歳。菊圃と後楽亭にて句あり。
天保11年(一八四〇)	五三	夏、千崖追福の句。秋、石岡神社に参拜。初冬に夫と横峰寺参拜。可大(播磨)九起(京)、風阿(防州)、五木(日内)、潮水(日向)、又愚(日向)青阿(江戸)等が来る。俳諧四卷、発句七十一。	映門五十九歳。鳳朗より来状。諸国附廻俳諧下巻を計画。初冬、菊圃その他と横峰寺参拜し句作。
			俳諧十二卷、発句二百二十八。

年号(紀元)	年齢	菊園事項	映門事項
天保12年(一八四一)	五四	春、鳳朗八十の賀の句あり。岱年(京)、鳥谷(丸亀)等来訪。俳諧二巻、発句二十。	映門六十歳。俳諧六巻、発句四十七。
天保13年(一八四二)	五五	春、孤童がかぞいろを祝いて句あり。「花供養」に弘化三年まで句が連載される。有節、青和、凡鳥、潮水等が来訪。俳諧三巻、発句八。	映門六十一歳。還暦の賀あり。俳諧十二巻、発句百七十一。
天保14年(一八四三)	五六	竹臣の旅立に錢の句を送る。「小雨凄々念集」に映門と共に句あり。鳥谷、月坡(近江)、桃五(越後)等が来訪。発句十九。	映門六十二歳。九月二条殿にて上席宗匠の御朱印頂戴。宝寿寺に芭蕉塚竣工。百五十年忌追福百題千句興行。俳諧五、発句六十九。
弘化元年(一八四四)	五七	俳諧開眼の連歌に一座する。「和良美適集」に映門と共に発句あり。俳諧一巻、発句三。	映門六十三歳。「おひさらへ」に句あり。俳諧四巻、発句六十八。
弘化2年(一八四五)	五八	「知名美久佐」に映門と共に肖像が載る。さくら戸のぬしの「いつまで草」に序文。発句十。	「俳諧相生集」に句あり。「静佳園草稿」はこの年で終る。俳諧三巻、発句五百十一。
弘化3年(一八四六)	五九	「なつ衣」「早縁集」「花標集」にそれぞれ映門と共に句が載る。	映門六十五歳。「俳諧人名録」に名が載る。葵笠に乞われ句評。
嘉永元年(一八四八)	六一	映門歿。十月映門追福の時雨会あり。「窓明集」に句が載る。映門の「静佳文音句帖」を途中から引継ぐ。この年六十六人、三四九句を記入する。	「静佳発句帖」、「静佳連吟帖」、映門六十七歳「静佳文章帖」、「思ひで草紙」外遺稿多し。
嘉永2年(一八四九)	六二	「嵐山集」に句あり。十月、映門追福の時雨会あり。「静佳文音句帖」に五十七人、二七六句を収録し巻六を終る。一卷より六巻まで七〇四人、七、一〇六句あり。	

嘉永3年 (一八五〇)	六三	新しく「静佳文音句留帖」を起す。この年六十八人、三一〇句を入れる。
嘉永4年 (一八五一)	六四	「此花集」「富貴集」に句あり。「静佳文音句留帖」に二三八人。四六三句を収録。句集「別れ霜」板行。
嘉永5年 (一八五二)	六五	秋、覚弁上人七回忌に宝寿寺に参拜。冬、時雨会に句を出す。菘生の金毘羅社の奉納俳額の判者となる。「小車集」に句載る。「文音句留帖」に九十人、三二五句を録す。
嘉永6年 (一八五三)	六六	「文音句留帖」に六十六人、二四一句を記録
安政元年 (一八五四)	六七	十一月大地震あり。玉嬾に便り知らせる。 「文音句留帖」に八十五人、三四〇句を留める。
安政2年 (一八五五)	六八	「文音句留帖」に七十五人、二九一句を収録。この頃玉嬾との文通多し。
安政3年 (一八五六)	六九	「静佳文音句留帖」二巻を起す。この年九十一人、三六九句を収録
安政4年 (一八五七)	七〇	七十の賀に玉嬾より祝歌あり。菅橋州より詩を贈らる。小松舟山の花陵神社に奉納する俳額の判者となる。「文音句留帖」に八十一人、二八〇句を収録する。
安政5年 (一八五八)	七一	「掌中俳諧安政附合集」に鶯居、黙翁と共に載る。「文音句留帖」に三十五人、一三九句を記入。
安政6年 (一八五九)	七二	「文音句留帖」に十六人、五四句を収録。
万延元年 (一八六〇)	七三	「文音句留帖」に二十人、七三句を記入。「淋しうに聞けばさびしき蛙かな」の句あり。
文久元年 (一八六一)	七四	「静佳文音句留帖」に十一人、二七句を収録。第三巻終る。一、二巻で三百四三人、二、八五二句を収録した。
文久2年 (一八六二)	七五	「うき秋も待たれて月の今宵かな」の句あり。
文久3年 (一八六三)	七六	二月二十七日歿。

長谷部映門 俳句

解けぬうち茶にも入らうそ春の雪  
枝うちのととかぬ松のおぼる月  
蓮翹やひと枝ひけは皆ゆるる  
人散てちる音きくや夜のはな  
月を待つ外に用なし夕さくら  
遣ひ湯も大儀や花の気草臥  
とし寄れば立居も鈍な華見かな  
水張た池静なりほととぎす  
ほととぎすふた声めにははや遠し  
山間や昼ある月にかんこ鳥  
飛たとも居るともしれず閑古とり  
ひと重のかもろいてもなし芥子の華  
卵のはなやをどろか邪魔て手折られず  
水に瀬の見えねどゆれる太蘭かな  
新茶とは思いかけなし京土産  
右瓦礫のみ御一笑猶御高詠ねき候

長谷部菊圃より姪の石原玉鶴宛て手紙  
夫映門死去の時

一筆染め参らせ候。

映門 草

映門事不幸の節は、御悔みも御座候て御文下され見事の御菓子と  
も御贈り下されかたじけなく存じ参らせ候。長々の病氣にて候え共、  
持病の事ゆえ、暖にも相成候えば丈夫付候事も哉と御医者方も申す  
事にて、余寒の薄らぎを繰り寄せるように存じ候処、急に右の通り  
にて力を落とし候て定めなき世のならいとは諦め候え共、春毎にも  
てはやし候庭の花など様々咲き出づるにも、まず涙のみ先立ち、悲  
しく存じ参らせ候。御察し下さるべく候。

中陰の頃にも見事の御菓子毎々御心につけられ候御事と浅からず  
かたじけなく存じ参らせ候。皆々様へ山々御礼宜しく御伝え申し下  
さる可く候。

先ずは右御礼のみ

早々かしこ

長谷部おばより

三月廿日

石原お橋様御もとに

註

映門 通称仲右衛門、長谷部氏

小松藩士、馬廻り、大目付として藩財政を再興。弘化五年  
(一八四八)没、六十七歳。『静佳園草稿』など。

菊圃 映門の妻「通」、目下伯巖(松山藩儒者)の妹。文  
久三年(一八六三)没、七十六歳。『別れ箱』など。

釈仏海師五十年祭忌法要会

平成七年十月十九日(木) 京都妙心寺龍泉庵(釈仏海墓所)

(主催者) 龍泉庵御住職 升田宗隆師 (参加者) 百名余



龍泉庵住職 升田宗隆師



釈仏海墓(妙心寺龍泉庵)

釈仏海師五十年祭忌

法要会に参加して

山本耕一路

天国の釈仏海師様、愚生は山本耕一路、私からすれば父太嶺の弟様で叔父様という事になります。よみじに入られて歳月は早く今日は五十年祭忌となりました。仏海様は崇高で清貧な当時は堪えられませんでした。今なればもつと生きられたものと後悔しても時代の流れは

仕方ありませんが、純粋な行為の輝きは感動胸郭を刺す思いです。正岡子規様との交友は子規会長の和田茂樹先生からも聴かされておられ、私も当会に入会して励んでおります。当時海南新聞では松山の傑物の一人として挙げられています。山本家の家系図は昭和二十年の松山爆撃による壊滅を避けて大切に保存しております。どうぞ心やすらかに鎮座されますようお願い申し上げます。最後になりましたが、墓石の案内などの写真を賜りました現龍泉庵庵主升田宗隆様に厚くお礼申し上げます。

## 記 録

○八月三日付け愛媛新聞「学芸欄」によると、俳句情報紙「子規新報」が来月創刊され、俳句に関する「俳都からのメッセージ」を全国に発信するのが主目的であるが、初めの一年間は子規に関する特集企画を取り上げる予定という。編集は小西昭夫氏を中心、愛媛県出身の研究者などが加わる。

○会員喜田重行氏におかれましては、このたび八篇から成る論集『子規点描』を発売されました。発行ならびに印刷は青葉図書、初版発行は七月二十七日。

○九月二十日付愛媛新聞学芸欄に連載の「四季録」に、子規傳副館長日野正寛氏の「私の子規忌」が掲載された。

○会員松本松吉氏におかれましては、このたび、愚陀仏庵一〇〇年

記念『漱石・子規の交友詩歌』（付道後温泉の詩歌、伊予先哲の詩歌）を出版されました。平成七年八月二十七日発行、発行所吟道明教館総本部、制作人の森出版、定価一、九五〇円。  
なお、同書出版記念集会在、同発行所二十五周年記念の集いにあわせて、十一月五日に行なわれた。

○十一月五日（日）、子規博において、特別企画展「子規と写生文」の記念講演として、和田克司氏の「現代文章語の原型 子規と写生文」があった。

○日本図書センター発行の「作家の自伝」シリーズ（全二十巻）の第二期シリーズ中の一巻として『正岡子規』が発刊された（平成七年十二月六日、愛媛新聞）

○前記喜田重行氏の『子規点描』が平成七年度の愛媛新聞社「出版文化賞」を受けられました。

### 子規会報 第六十七号

季刊（四、七、十、一月）

発行日 平成八年一月十九日

発行 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

郵便振替 徳島二一八六八

事務局 石原敏男

松山市正円寺二一七一五

電〇八九（九七七）〇三〇九

お買い物が5%ご優待割引で！



## 会員様募集中

〈ご入会のお申し込み  
お問い合わせは〉いよてつそごう南館3階  
カードサービスサロン ☎(0899)48-2630  
いよてつそごう各店でも、ご入会のお申し込みを承っております。

暮らしにお役に立ちます。いよてつそごうカード。



### いよてつそごうカード

- お買い物5%ご優待割引
- キャッシングサービス  
(提携先 株式会社マツセン  
登録番号 四国財務局長(2)第00051号)
- クイックローンサービス  
(提携先 株式会社マツセン)
- お中元・お歳暮シーズンのギフ  
トは特別価格で
- いよてつそごうの駐車場が無料  
扱いに

- お得な催し 素敵な集いにご招待
- 各種ご優待施設

万一、失くしたときも安全です。  
安心してご利用いただくために、カードには  
盗難保険をかけています。紛失や盗難など  
による不正使用にも万全を期しています。  
(この保険料はいよてつそごうが負担いたします。)

### おことわり

いよてつそごうカード発行に際しては簡単な審査  
をさせていただきますので、留意に添えない場  
合もございます。あらかじめ、ご了承ください。



いよてつ  
そごう  
松山・市駅

松山を代表する

# 銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

## 巴 堂 本 舗

TEL 0899 (41) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ  
四季の移り変わりを楽しめる露天  
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

# 春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1  
☎ (0899) 41-9156



お食事処…かすが…  
石畳、格子戸、木の香もかぐわしく  
くつろぎのときに情緒ひとしお

新  
刊  
案  
内

第10回愛媛出版文化賞受賞作品

## 占領期における愛媛の教育 野口 学 著

A5判 352頁 定価2,400円

### 自 費 出 版

お気軽にご相談下さい。  
編集からお手伝いさせていただきます。



印刷 & 出版 (有) 青 葉 図 書

〒790 松山市小栗6丁目3-23 ☎ (0899) 43-1165